同じ時を過ごし見つけたもの

ホストファミリーが経験した11日間

ド市の学生たちは市内の家庭（ホストファミリー）にホームステイ。家族たちは、外国人と一緒に生活を過ごしたことで、何にも代えがたい貴重な経験をしたようです。

今回のド市学生訪問団を受け入れたのは7家族。ホストファミリーを幾度と経験しているベテラン家族もあれば、初めての受け入れで心配だった家族も。

行程には、ホストファミリーと学生が、通訳を介せず家族で何をするか考え、交流する「ホストファミリーの日」があります。日本の良いところを教えようとあれやこれやと考え、周りに海がないドイツの学生に海を見せたいと庄内や松島に連れて行ったり、歴史的建造物を見学したり、親戚を呼んでバーベキューをしたりと、片言の英語と、身振り手振りで思いを伝えながら、学生との距離を少しずつ縮めました。

ここでは外国人と過ごした11日間でホストファミリーがどんな経験をしたのか、多くの留学生を受入れるベテラン、井上さん一家（長清水1）と初体験の村越さん一家（牧野）にインタビューしました。

上手な英語よりなまりのある日本語で

何回もド市学生を受け入れてきた井上さん一家。今回奮闘したのは一夫さん。今までは英語の話せる規子さんと優花さんに会話を任せていたが、時間がとれず、英語が話せない一夫さんが対応することに。初めは戸惑いがあったと言います。

「男3人で庄内に出かけたり、食事をしたり、温泉にも行った。イタリア料理店ではピザしか食べずにお腹いっぱいという彼らに「スモールパスタはどうだ」と、大盛りのパスタを持って行ったら、驚いてしまって。後日、満腹なのでおかわりはいらないと妻と話していると彼らは「じゃぁ、スモールパスタを食べに行こうよ」と冗談を言ってきた。上手に英語が話せなくとも冗談が言い合えるって素敵だと感じた。温泉では、不安そうにしていた彼らに「いいから俺のマネをしろ」と一緒に風呂へ。露天風呂で仁王立ちして夜景を見ていると、後ろで二人も真似をしていたのがかわいくて。

言葉よりも気持ち

（井上一夫さん・長清水1）

～オト君とロベルト君との11日間～

（左から）井上規子さん、善吉さん、るり子さん、一夫さん、優花さん、佐竹華奈さん（親戚）

裸の付き合いで心の距離がさらに縮まったと感じる」と振り返りました。

一夫さんは「みんなが心配するのは言葉の問題。上手な英語、ドイツ語じゃなくても「け」「寝ろ」などなまりのある日本語の方が雰囲気でわかるのか、彼らに通じた。一緒に楽しもうという気持ちがあれば、通じ合える」と英語が話せなくても、心と心で通じ合えるものがあることを実感していました。

離れていても家族にかわりなし

留学生には日本の父であることを示すために「パパさん」と呼ばせる一夫さん。「同じ釜の飯を食べていると、家族の一員と思えてくる。一緒にいると国なんて関係ない」と話します。

「交流は相手に面と向かうのが本来の姿。気持ちや思いが、言葉にできなくても直接向き合えば伝わる。本来の交流の在り方を改めて知ることが出来るのが魅力」と今回の交流を笑顔で振り返っていました。

【コラム】学生交流ってなんだろう？

～国際交流推進事業の目的～

種をまき　ド市友好都市盟約締結　交流が始まる

市は、時代を担う若い世代のド市派遣を支援。平成7年から隔年ごとに学生の派遣と受入れを行っています。現地で異なる文化や生活を体験し、身近なところから国際感覚を育てることが目的です。

芽が出て　学生訪問団の派遣　ホームステイの受け入れ

交流の方法は学生訪問団に参加し、ド市で日本とは違った文化や交流を通して学ぶこと。また、ホストファミリーとして学生を受け入れ、一緒に生活し、交流する方法もあります。向き合って交流することで気付く、人間性や風土、発見があり、国際感覚を養う機会となります。

花が咲く　広がる交流の輪

外国人との交流を通して、自身の「異文化にもっと触れたい」という意欲をかきたて、積極的に外国人の受入れをする家庭や留学する学生、経験をもとに活動する人もいます。

「斎藤茂吉の道」開設や名取市への災害支援など自治体同士での連携にも、広がりを見せています。

甚平を着て上機嫌。着心地の良さを気に入って、どこへ行くにも甚平を着て外出した

習字や座禅を体験。ひらがなは上手にかけたが、漢字は難しいと話す

「自分から学びたい」子どもの成長を実感

（村越 親さん・恵子さん夫妻・牧野）

～ヘルビッヒ君との11日間～

（後列左から）村越 水さん、木村有希さん（須田板）、村越恵子さん、村越 親さん
（前列左から）佐藤幸江さん（親戚）、佐藤純太さん（親戚）、村越 心さん、村越 和さん

何気ない日常が新鮮な毎日に

今回初めて受け入れとなる村越さん一家には、多くの不安や葛藤がありました。「共働きで、とても受け入れられるような環境ではないと思っていました。どうしてもやってみたいという妻の強い思いに負け、受け入れることに」と親さんは受け入れたきっかけを話し、「何を話したらいいかわからず、最初は沈黙が続きました」と恵子さんは緊張の初日を振り返ります。

二日目以降は寿司を食べたり、習字を一緒に書いたりするほか、中川さん一家（マティス君を受け入れたホストファミリー）と一緒にお寺で座禅体験もしました。「説明は通訳できなかったが、心で感じてくれたのではないでしょうか。日本人でもあまりしない経験ができた」と、親さんは話します。恵子さんは「一緒に歯を磨いたり、洗濯物をたたんでくれたり、気兼ねなく日常にとけ込んでくれたのがうれしかった。英語が飛び交うこと、ご飯を食べること、すべてがとても新鮮でした」と充実した日々を語ります。

英語は電子辞書を片手に交流。しかし、会話が中断するため、日本語で身振り手振りを交えて話しをした方が伝わったとも。「お互い理解する気持ちがあれば何とかなるもの」と言葉の壁を「体」で飛び越えました。

苦手な英語に取組む娘の成長

今年中学に入学した水さんは、初めて習う英語に苦手意識を持っていました。「ヘルビッヒ君との交流で、部屋から英語を練習する声が聞こえてきたのには驚いた。自ら進んで英語を勉強するようになったことが一番の収穫」と村越さん夫妻は話します。

水さんは「扇子は持ち運びに便利、畳の匂いは落ち着くことなど日本文化の良さを改めて実感できた。もっと英語を勉強して、深くいろんな会話をしたい」と、ヘルビッヒ君との楽しかった時間を振り返りました。